岩手県立博物館研究報告　第35号　2018年3月　31 ～ 46ページ
Bulletin of the Iwate Prefectural Museum, no.35, pp.31 ～ 46, March, 2018

企画展「遮光器土偶の世界」をふりかえって

金子昭彦

The Notes for the Exhibition of “The World of the Clay Figurines with Snow-Goggles”

Akihiko KANEKO

岩手県立博物館　020-0102　岩手県盛岡市上田字松屋敷34.　Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

Abstract

Last year I took charge of an exhibition in museum for the first time at the age of 53. The title of the exhibition was “The World of the Clay Figurines with Snow-Goggles”. In this paper, I looked back upon the exhibition and gave advice to anyone in the same situation.

はじめに

本誌、『岩手県立博物館研究報告』は、印刷物としては今号が最後となった。実は、前第34号も印刷されていないが、これは国体開催による臨時的措置であった。しかし、県予算マイナスシーリングは、その後も止まらず、ついに印刷を断念せざるを得なくなったのである。Webサイト上では、今後も『研究報告』の刊行は続き、電子ジャーナル化は時代の流れである。しかし、短い論文が主体の理系と異なり、文系、特に考古学分野で完全に電子ジャーナル化した例を知らない。予め読む必要があるとわかっているバックナンバーの閲覧に電子ジャーナルは便利だが、蛸壺のように個別のWebサイトに格納されている電子ジャーナルを逐一開き、読むに値する論文があるかどうか確認する作業をどれほどの研究者が行うだろうか。考古学界では、地方誌等（『〇〇考古学』、『〇〇研究紀要』の類）の雑誌が多すぎて、印刷され比較的手に取りやすい今でも「スルー」される場合がほとんどである。言うまでもなく、読むに値するか確認するには、手にとってパラパラめくるのが最も早い。いずれにしろ、少なからぬ時間を費やして作成する研究の発表の場として、他の研究者の目にふれにくい、印刷物を伴わない電子ジャーナルは魅力的でないことは確かで、筆者も投稿する気にはなれず、本誌第33号（2016年）に掲載された「東北地方・縄文晩期の土偶関連遺物（１）」の続きは、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要』に掲載していただいている。

そうした意味で、筆者にとって『岩手県立博物館研究報告』は、今号が最終号である。記念すべき最後の印刷号に記念になるような文章を投稿したいと考えたが、何を題材としたら良いか悩んだ。

岩手県立博物館の考古分野では、初代学芸員、故小田野哲憲氏の存在が大きい。小田野氏の専門は（東北地方の）弥生時代で、本誌第１号にも氏の弥生時代に関する論文が掲載されている（小田野　1983）。また、どういうわけか、岩手県立博物館の考古分野は、代々弥生時代を専門とする研究者が続き、当館の特色を成している。

東北地方、岩手県の弥生時代は、当館の発足当時には不明な点が多かったが、その後三十年以上を経て、多くの調査成果が積み上がり、岩手県史、弥生時代史、日本史に時空的に位置づけられる段階までほぼ到達している（佐藤　2015）。調査成果を歴史に昇華したのは、佐藤嘉広氏を除けば、主に、小田野氏と、氏の明治大学の後輩にあたる石川日出志氏とその高弟であるが、筆者も、職務で行った二つの調査で寄与したと認めていただいている（佐藤　2015）。

こうした経緯で、岩手県の弥生時代研究の現状をテーマとすれば、本誌「最終号」にふさわしいのではないかと考えた。

ところが、その概要は、佐藤（2015）に既に十分にまとめられていることがわかった。学術研究の成果をまとめるのは、学芸員の仕事の一つだが、詳細なデータ（調査成果）を盛り込んで論文に仕上げるのは、そ

の分野の研究者の仕事であり、縄文時代を専門とする筆者の任ではない。

そこで考えたのが、53歳にして初めて担当した展覧会である。筆者は、埋蔵文化財センターのプロパー職員であったが、2015年に配置転換で当館にやってきた。当初は文化財科学部門に配置されたが、機器使用を伴う理系分野の業務に年齢的にもなじめず、考古分野に移していただいた。ところが、ホッとしたのもつかの間、次年度の企画展を担当するよう指示されたのである。担当するはずだった前任者が異動したためである。筆者は、この時二年目であったが、一年目は文化財科学部門に配置されたこともあって、展覧会については何のレクチャーも受けておらず、それなのに、テーマを決めるところから始めて一年で開催まで持っていかねばならなくなり、途方にくれ、不安で眠れない夜もしばしばあった。

おかげさまで、企画展は概ね好評だったようである。そこで、この顛末を投稿しようと考えた。本誌は34号も続いているが、掲載されたのは、ほとんどが各分野の研究論文で、博物館業務に関わるのは（第１、４、８～12、22号）、体験教室を中心としたアンケートの集計結果がほとんどであり、展覧会に関する文章は記念になると考えた。

一年前の不安でいたたまれなかった自分に宛てて書くことで、同じような境遇に陥った方の参考になれば幸いである。

１　企画・事前準備・全体の流れ

（1）テーマ

会期は、平成29年６月３日～８月20日と既に決まっていた。展覧会まで一年しかなく、よく知っている分野しかできないので、土偶展とすることにした。近年、10月９日を土偶の日とするなど、一般の方の間で土偶人気は高まっているので、集客も期待できるのではないかと考えた。しかし、土偶展は、2012年の企画展で開催している。前回の土偶展は、梅垣焼の紹介を除き、年代順に並べ、出土状況など土偶の特徴を紹介する一般的な展覧会だったので、今回は個性的なものでいこうと考え、結果的に二つの点で差別化を図ることになった。

土偶展で来館者が最も関心を持つのは、その用途であろう。もちろん定説はなく、一般的に言われている説を紹介すれば、ありきたりで退屈なものになる。筆者は、土偶の用途を知りたいと考え、もう三十年以上試行錯誤してきたので、万人を説得できるとは思わないが、それなりの持論はある（註１）。これまでの多くの説が根拠を具体的に示さないことに不満を抱いてきたので、筆者は根拠を展示という形で示す準備もできている。そこで、土偶の用途について一つの解釈を示すことを目的とした。

もちろん、全ての土偶が同じ用途とは限らない。筆者も対象を絞って検討してきており、それは、東北地方・縄文時代晩期に存在した遮光器土偶である。そこで遮光器土偶を対象とした展覧会とした。当館の常設展示室にある重要文化財の遮光器土偶が来館者の間で人気だったこともある。

観覧者は、中高の教科書程度の知識はあり土偶に興味はあるが具体的にはほとんど知らない一般の方を想定した。したがって、文字パネルは、専門用語は一切使わず、高校生以上なら読めば理解できるようにしたつもりである（註２）。文字パネルを読まない方と小学生以下には、こちらの主張は読み取っていただけないが、展示品から何かを感じ取っていただければと考えた。

（2）展示構成（章立て）

遮光器土偶の用途をテーマとする展覧会ということで、土偶だけでなく同時代の出土品なども展示することになり、変化が付けられて良いのではないかと考えた。土偶の用途を考えるために、伝統、文脈、使用痕などさまざまな角度から検討するということで、次のような章立てを考えた。第１章土偶の歴史―遮光器土偶の前―、第２章遮光器土偶とは、第３章遮光器土偶の広がり―北海道から兵庫県まで。遮光器系土偶―、第４章同じ時期の土偶、第５章遮光器土偶を生んだ亀ヶ岡文化、第６章土偶の終わり―遮光器土偶の後―、第７章遮光器土偶は何のために作られたのか。

一応、第１章と第６章で、他の土偶の展覧会と同様通史的な側面も扱ったが、第１章の展示品は、岩手県出土品に限り、それも当館と埋蔵文化財センター所蔵品で間に合わせ、第６章も、東京国立博物館でお借りした伝長野県出土の黥面土偶以外は、青森県、岩手県出土品で済ませた。なお、第２章で、遮光器土偶の時期的変遷、第４章で、遮光器土偶と併存する時期の土偶を扱っている。第３、５、７章が、今回の展覧会の特色となり、特に第５章は、「こんなにすばらしい工芸品がこの時代にあったのか」との声を聞きたくて、

第２章の次に力を入れ、選りすぐりの一品を探し、お借りした。目玉となったのは、当時国内に数点程度しかなかったと推測される県内軽米町出土のガラス玉と重要文化財の土面である。第７章は、展示できるものはあまりなく、文字パネルによる説明が主体となる。

第２章で細かい時期的変遷を扱うため、どうしても考古学の時間の単位「土器型式」（専門用語）にふれざるを得ない。そこで、第７章の後に「コラム展示」として、その説明を一般の方向けにできるだけ分かりやすくと試みたが、反響があったのは、同業者、それも土偶研究者の一人だけで、「よくぞ試みた」という激励のみであった。

今回は展示品撮影禁止にせざるを得なかった。一部機関から「当館の感知しないところで誤った情報が拡散されるのは困る」との声があったためである。そこだけを撮影禁止とすることもできたが、当館の特別展示室は、職員が常駐していないので管理が行き届かず、間違って撮影されＳＮＳで拡散されてしまう恐れ大である。そうなった場合今後一切お借りできなくなる可能性が大きいので、全面禁止とせざるを得なかった。「展示品保護のため撮影禁止」と簡潔に表示したが、実際には「展示情報保護のため」であった。予想通り多数の苦情が寄せられたが、図録700部が1,600円という値段にもかかわらず期間中に完売したのは、このおかげもあるのかもしれない。

撮影禁止としたので、その代わりというわけでもないが、入口前に遮光器土偶の模型との撮影コーナーを設けた（図３）。前年度予算の執行残で身長１ｍの模型を、当館の模型制作をいつもお願いしている方に、ほぼボランティアの価格で作っていただいていた。

展示装飾も、いつもお願いしている方にボランティア同様の価格でパネル作成も含め作っていただいた。バナー等、パネル原稿以外全てお任せし、おかげで、初めて担当した筆者にも、少なくとも展示装飾の上では恥ずかしくない展覧会を開催できた。このお二方がいなくなってしまったら、今の予算で十分な展覧会が開催できるのだろうか。

（3）関連事業

集客イベントとしては、奥州市出身の漫画家の方が、その文庫本の中で当館の遮光器土偶にふれていることもあり、協力を得られるかもしれないと期待したが、何の予算措置もなく実現しなかった。

当館の考古部門には「考古学セミナー」という毎年開催している事業があり、関東方面からの旅費程度であるが予算措置もなされている。基本的には講演会と現地見学会の二本立てで、考古部門で展覧会を開催する年には、関連事業として組み込むことになっている。

そこで、講演会の代わりに土偶シンポジウム「土偶は壊す？壊さない？」を開催した。土偶研究にとって、知る人ぞ知る重要なテーマである。シンポジウムといっても、基調講演の講師分しか旅費がないので、土偶研究者にお声掛けし、「よろしかったら当日パネラーとして発言願います」と、ボランティアを募って回った。

現地見学会は、旅行業法の関係で現地集合が条件となっていたため（当時）、悩んだ。土偶を出土した遺跡に行きたくても、ほとんどは、駐車場もないところで付近に公共交通機関もない。他の博物館での展示解説会も考えたが、当館が主催で実施する意味がなく、またそれほど多くの点数の土偶を展示している施設はない。苦肉の策で、花巻市総合文化財センターに協力をお願いした。ここは、失礼ながらあまり周知されてない展示施設なので会場とする意義は大きいと思われ、土偶の展示数も比較的多く、何より所長が有名な土偶研究者で、現地開催するなら無料で講演してくださるという。テーマは「土偶の里、花巻・北上―土偶多出遺跡の謎に迫る―」とした。ここの展示数が多いのは、元々、花巻市というより旧大迫町内に多出遺跡が多かったからである。ただし、隣の北上市には、土偶出土点数日本第三位の九年橋遺跡があり、ふれないわけにはいかず、こうしたタイトルとなった。そこで、北上市の遺跡紹介に加え全体の趣旨をまとめるため、筆者が研究報告という形で発表することにした。所長の講演と展示解説会、筆者の研究報告という三本だてなら、当館主催で花巻市総合文化財センターを会場とする意義がある。ただ、タイトルに北上を入れているのに見学しないのはよろしくないので、オプショナルツアーと称して、午後に希望者相手に北上市立博物館和賀分館の展示開設を筆者が行うことにした。ここも、知る人ぞ知る展示施設だが、土偶の数は比較的多く、無料なのも良い。こうした二施設を会場として主催するのは、岩手県博物館等連絡協議会の事務局としてふさわしく当館主催の意義は大きいと考える。実際、博物館友の会の会員の方にお褒めの言葉をいただいたが、遠くて年齢的に自力では行けないとも言われた。

日曜講座という当館で第二、第四日曜日に開催する当館学芸員ほかの１時間30分の講演会があり、企画展

会期中に三回の関連する日曜講座を開催した。６月25日は、筆者の「遮光器土偶の使い方」、７月９日には当館学芸員丸山浩治氏の「雨滝遺跡と雨滝論争」、７月23日には（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター高木晃氏の「盛岡川目Ａ遺跡・600点の土偶」である。

展示解説会の回数・時期は、概ね前年度に倣った。６月10日（土）、７月30日（日）、８月６日（日）の三回、いずれも14：30～15：30に開催した。昨年から開催している夏休みの子供向け展示解説会（小学生対象）は、８月１日（火）、11日（金・祝）の二回、いずれも10：30～11：30に開催した。

（4）準備等その他

遮光器土偶が専門で日ごろから考えていたため、展示構成まではすぐまとまった。借用したい資料についても心づもりができたので、他館に押さえられる前にと、一年前の６月から連絡を取り“予約”させていただいた。幸い、競合するような展覧会はなかったようで、支障のないものは全て予約することができたが、会期が長すぎるということでしぶられた機関もある。借用機関が非常に多く準備の支障となることが予測できたので、原則として、岩手県と関東地方から借りられないものだけ、東北地方の他県から借りることとしたが、秋田県南部など、借用予定の他機関から離れて点在する所は、効率が悪いので断念することとなった。仙台市教育委員会だけは、最も新しい土偶ということで、どうしても拝借したく、外さなかった。ちなみに、当館にあった資料は、290点中９点のみである。

東京国立博物館（以下、東博）については敷居が高かったので、前任者（前回の土偶展担当者）に聞いてから連絡を取った。前任者には、その他にも様々な教示を受け、講師歓迎会等でもお世話になり、感謝にたえない。東博は、実際の手続きに入る前、会期の６ヶ月以上前に、貸してくれるどうか申請書類を提出しなければならないので注意を要する。また、実際に対応してくれる部署と窓口が別なのも同様である。今回はあまりお借りできなかったので、代わりに東京大学総合研究博物館からたくさんお借りした。実際の借受手続きは、次章に記した。

展覧会概要書と展示室配置案を会期前に周知する必要があり、当館の場合は前年度の12月か２月の会議でプレゼンテーションを求められるので、それまでに作成しておくのが理想だが、特に配置案は多少ずれても構わないようである。さらに、事前に配置を机上で想定するのは難しく、多少ずれても問題ないと言われた。

展覧会までの準備過程を事前に学ぶ機会がなく、子細に聞きたいが他の学芸員の時間を多大に奪うことになるので、仕方なく、お聞きするのは最小限にして、これまでに当館で開催された展覧会の書類綴りを見て、コピーやメモを取った。なかなか具体的には分からず、不安は募るばかりであった。そんな時には、土偶研究会の仲間に言われた「自分の研究成果を展覧会という形で発表できる研究者はそうはいないよ」という言葉を思い出して気持ちを奮い立たせた。綴りを見て得た最大の成果は、けっこう展覧会によりマチマチで融通が利くのだなという点である。

県財政も厳しい折、知事部局の「希望郷創造推進費」に応募するからと９月になって主管課から資料の提出を求められた。見積書を急いで集め、また知事説明書は写真等ヴィジュアルを重視したものが要求され技術的に難しい筆者は難儀した。結局採択されず、振り回されただけであった。

（5）全体の流れ（表１）

１月に資料調査を終了し、２～３月で図録をと考えていたが、『行事案内』の原稿を求められ、また、早く借受手続きを進めた方が良いという教示を受け、予定が変わってしまった。図録は家でやるように努めたが、他の仕事もあり、思ったように進まず、本文の原稿にかかれたのは３月下旬で、美術品専用車の手続きが思ったように進まなかったこともあり、実際の借受が始まった４月に全てのピークが集まって難儀した。連日の借受（図８）で平日日中は他の仕事ができないため、36協定の上限一月45時間まで超過勤務したが、世の人は、この倍までやっているんだと気づき愕然としたものである。パネル作成、展示作業は、当館の展覧会プロジェクトチームが、そのほとんどを担ってくれたため、筆者が大変だったのはここまでで、５月には余裕ができたが、超過勤務したいわけでもないのに、連休に重なり通常の勤務時間を確保できず面倒であった。

暦に振り回されると言えば、返却もそうで、当館は毎年９月上旬10日間がくん蒸期間となっていて、館内に入れない。返却が遅くなることに御理解いただき、また後続の展覧会担当者が撤収に十分な猶予をくれたので、何とか乗り切れた。事前にやきもきしたが、当館の展覧会の通常のスケジュールは、①６月上旬～８

表１　企画展の工程

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
企画・予算	担当 決定	検討	見積 依頼	予算		希望郷予算 見積書	説明書		予算 確定										
資料調査				明大			アポ 取り	東北 県外	県内	センター 関東以西									
告　知											行事 案内		博物館 だより		オープン 事業団	FM 岩手も	FM 岩手も		
ポスター チラシ											デ	ザイ ン	印刷	ポスター 発	送	チラシ 増刷	Twitter Twitter		
図　録								撮影	漫画	撮影	様式	仮割付	筆	増刷 割付	入札	増刷			
資料借受			予約	予約					打診も		検討 日程	写真 打診	依頼 手続き	手続き	起案 借受	撮影 借受	校 借受	正	発送 復命書
美専車											打診	手続き 日程	借受 （上記と	借受 同じ）	日程	起案	契約	借受	返却
パネル キャプション												打診			確定	原稿	原稿 作成	作成 展示	作成 展示
展　示																	配置 養生	配置 養生	追加 変更 追加 撤収 収納
広　告 宣　伝																代理店 契約	テレビ 中継	テレビ CM他	ラジオ 中継 フリー ペーパー ラジオ 中継
マスコミ対応																			
イベント			立案								立案						解説会	日曜 講座	土偶 シンポ 日曜 講座 解説会 セミナー 考古学 準備 セミナー
その他事務			東博 申請														弘前市 報告		公開届出 作成 発送
来客対応																			
資料返却																		日程 打診	梱包 返却 梱包 返却

月下旬、②９月下旬～11月下旬、③12月下旬～２月下旬、④３月下旬～５月上旬の四回となっていて、②は準備期間にくん蒸があり、③は借受返却とも、④は借受時に、道路凍結が心配と、最も問題が少ないのが今回の会期なのであった。くん蒸で期間が制限され、９月後半は返却に忙しかったが、返却は借受より日程をつめられ、またこれで作業はほぼ終了と気分が良いので、さほど負担には感じなかった。

６月前半にはイベントをあまり入れなかったのだが、マスコミ取材が非常に多く結果的に正解であった。イベントを会期の真ん中７月に集中させたのだが、後半は夏休みで、遠方を中心に来客が多く、対応に追われ、土日はほとんど休みが取れなかった。

２　資料調査・借受・返却

（1）資料調査（現況記録）

最も悩んだのが、資料調査である。というよりも、借受に伴う事前調査で、借りている間に瑕疵がなかったか、お借りする前に現況を記録しておく。本来は借受時に行うべきものだが、時間の余裕がないため、事前に行うことがほとんどである。貸す側が記録したり、一緒に作成することもあるが、借りる側が記録する場合が多いようだ。当館にも様式があり、その場で記録しカーボンで転写して片方を先方に置いてくるのが原則である。

まず悩んだのが、いつ調査するかである。あまり早すぎると先方の保管状況が変化する可能性があることと、車で伺う機関が多いので真冬は避けたいという気持ちがあった。結果として、雪道の遠距離移動は避けたいので、岩手県以外の東北地方は11月、県内は12月、近く借り受け点数の多い岩手県の埋蔵文化財センターと公共交通機関で伺える関東地方以西を１月に行った（表１）。なお、資料調査の結果、脆弱なため、お借りしないことにした資料が１点あった。

最も悩むのが、どこまで詳細に記録するかである。発掘調査による出土品は、壊れているのが通常で、中には粉々の破片を接着剤で復元したものさえある。そのひび割れ（割れ線）を全て記録するのか。最初の頃はやっていた。当館の転写紙で一から記録すると多大な時間を要するので、自然にデジタルカメラで記録するようになった。しかし、これだとその場でメモできず、影が生じて詳細を後で確認できないこともあるので、手描きのメモも併用せざるを得ない。幸い、発掘調査による出土品は、報告書に実測図が掲載されているので、これをコピーして持参し、そこに現況を記録することにした。今回お借りする資料は、報告書がない場合でも写真図録が刊行されていたので、その場合はこちらをコピーして同様に扱った。

問題は、これを加工して先方にお渡しできる形にすることで、それなりの時間を要する。しかし、資料調査を続けていくうちに、先方はそれほどのものを求めているのかと思うようになった。特に、埋蔵文化財センター等ではそう思わせる機関が多く、立ち会っていただいている間、筆者が長々と記録していると明らかに困惑している雰囲気が伝わってきた。

実際の資料借受でも、ほとんど乖離はなかったが、東京大学総合研究博物館では齟齬が生じた。写真図録のコピーに赤ペンでメモした調査票を白黒でコピーし持参したのだが、カラーコピーを採らせて欲しいと言われた。読めるような字ではないので恐縮し、「改めてちゃんとしたものを作成しお送りしますか」と申し上げたのだが、そこまでは必要ないとのことで、せめて原本の方を置いてきた。

資料調査でもう一つ重要なのが、図録用の写真撮影である。資料をお借りしてから図録作成まで十分な時間がないため、写真をお借りできない資料については、調査時点で撮影しておく必要がある。一応習字紙大の敷物を持参して臨んだのだが、大きいものはやはり無理であった。ライトは持参しなかった。デジタルカメラ（２万円程度の私物）の撮影で対象物が皆比較的小さいため、ライトを当てる必要性はあまり感じなかったが、それでも幾つか断念せざるを得ないものがあった。背景を選べない場合が多く、また、基本的に先方が立ち会うので、あまり長く時間を掛けられなかったせいもある。このように撮影には制限が多く、図録用写真は、お借りできるものは全てお借りした方が良いと思われる。

（2）借受・返却

28箇所、281点の資料をそれぞれ一ヶ月程度の期間で借受、返却しなければならず、全ての関連業務の中で、明らかに最も多くの時間と労力を費やした。関東以西の６箇所、45点の資料は、美術品専用車を使用した。美専車について詳細は、次々項で示す。

借受も返却も、基本的に以下の要領でアポを取った。「○月○日から○月○日の間で、都合の良い日、悪い日をお知らせいただければ幸いです」と基本的にメー

ルで連絡し、その回答を待って計画を立て、改めて希望日をやはりメールで連絡した。３ヶ月前なら大体「いつでもＯＫ」という回答をいただいたが、幾つか指定日のある機関があり、それを基に借受、返却スケジュールを立てた。梱包材が限られ、また遠方の出張が連続すると他の仕事ができないので、多数お借りする機関や遠方の機関は、間を開けて連続しないよう注意した。大体同じくらいの積む量（箱の大きさ×数）になるようにも留意した。所要時間は、資料調査時のメモが役に立った。

実は、借受は、あまり長くお借りしない方が良いと考え、当初５月上旬を想定していたが、「それだと展示する時間がない。４月中に借りる必要がある」と先輩の教示を受け、あわてて２月中旬にメールした次第であった。この教訓を基に、返却時は、８月後半～９月を想定して、６月上旬にアポをとり始めたので６月27日にはスケジュールをほぼ確定できた。ただし、早すぎたのか、後に、一つの機関が、その前日に試掘調査が入ったので、雨天でずれ込んだ場合変更してほしい旨連絡があった。結局順延にはならず事なきを得たが、借用機関が多くスケジュールに余裕がなかったため、次の日に予備日を設けたが（図９）、直前まで大変不安であった。聞くところによると、後から変更を求められる機関も多いらしく、今回は恵まれていた。また、天候にも概ね恵まれ、借受、返却日が多い割に、雨が差し支える程度に降ったのは、返却時の２日だけであった。駐車場から搬入口まで屋根のない機関も多く、運が良かったと言える。

借受時は、荷物の全体量もわからず、初めてで梱包作業にどのくらいかかるかわからず、かなり日程的に緩やかで、次の機関への移動に余裕がありすぎて時間をつぶすのに困ったこともしばしばあった。

次項で述べるように、借受時に、荷物の量（箱の大きさ×数）を記録しておくと、返却のスケジュールを立てるのに便利である。

保管のリスクは伴うが、図録用の写真撮影や展示作業を考えれば、可能な限り早くお借りした方が良いようである。開幕前１ヶ月は展示作業にとっておくのが理想的らしい。ただし、美術品専用車を必要とするような資料は、まず無理で、開幕２週間前程度がやっとである。今回展示作業は、かなり手伝っていただいたので不安はなかったが、この時期美専車集荷に同道するのは正直大変である。

借受日が決まれば、次に事務手続きとなる。指定の書式のある機関は比較的少なく、当館の様式を使用した。依頼状、承諾書、借用書、借用する資料を明示したもの（一覧表や図のコピーなど）を「資料の借受ならびに掲載許可について（伺い）」として起案し、決済後は、展覧会概要書（出来上がった後はチラシなども）を加え、借用書以外を、返信用封筒を同封して送付した。借用書は、借受当日に資料と引き換えにお渡しし、返却時にまたお返しいただくものである。

承諾書には、貸し付け条件が書かれ、機関によっては、展示状況の報告を求められるところもあった。

起案内容はほぼ同じなので、複数機関、あるいは全てまとめて起案することも可能である。しかし、筆者の場合は、年齢的なものもあり、また借受手続き時は、他の作業も忙しく脳が大分弱っていて、同時並行だと間違って送付する恐れが高かったので、借受日が確定した機関から少しずつ行った。

借用品が指定文化財の場合は、さらに書類の手続きが必要になる。当館は、文化財保護法に定める「公開承認施設」であり、事後届出で済んだため、会期前の繁忙期に煩わされずに済んだ。なお、都道府県等指定文化財の場合は、手続きがそれぞれのようである。

日程が確定したら、カレンダーに訪問機関と時間を記入した（図８）。当館の資料借受、返却は二名が基本となっているので、考古部門の他の二名に、カレンダーをコピーして渡し、その日都合の良い一緒に行く方を決めてもらった。ただし、仙台市教育委員会は、近くに他の借用機関がなく、切手大の破片１点のみの借用だったため、先方の許可を得て、筆者が一人で公共交通機関を使用して借受、返却している。その他は、大きいものがなかったので、当館の公用車で事足りた。

図８は、４月の借受日程である。この他、３月18日（土）午後、３月22日（水）午前、５月11日（木）、５月21日（日）～25日（木）（美専車）にも行っている。余裕を持たせたため、４月11日（火）～25日（火）まで、閉館日の月曜日を除くすべての平日が埋まってしまって日程的に大変きつかった。

図９は、９月の返却日程である。上旬は、当館くん蒸期間のため館内に入れず、５日（火）に、前もって館外に出しておいた資料の返却を行っただけである。この他、８月24日（木）、27日（日）～30日（水）（美専車）にも行った。梱包は事前に行うため、できるだけ間を開ける必要があるが、返却自体は、開梱するだ

けのため時間はかからず、また容量や所要時間も既に把握されているため、一日に多機関を詰めることが可能である。

借用書を、借受時に置いてきて、返却時に返していただくのだが、他に気を取られることがあると忘れがちである。借用機会の少ない機関の場合、先方も気づいてくれない時があって要注意である。

借受、返却とも、出張なので復命書が必要である。正直あまり書くこともないのでメモしておいてまとめて復命した方が時間が短縮できるが（表１）、ワープロで連続して作成するがデータとしても残しておく場合、上書きしがちなので注意が必要である。

（3）梱包・開梱

最も不安だったのが、梱包である。大学の博物館実習で習った記憶はなく（習っていても憶えているはずがないが）、これまで研修機会もなかったので、当館主催で市町村新人担当者向けの文化財取り扱い講習会の中の梱包研修を特別に受講させてもらい、幸いなことに、借受・返却は職員二人でということになっていたので、熟練者のやり方を見よう見まねで憶えるように努めたが、最後まで不安はぬぐえなかった。あくまで真似しているだけで、そのやりかたにどういう意味があり、どうしたら壊れてしまうのか、そのメカニズムは全く分かっていないからである。ぜひ、そうした理屈も含めた梱包実習を受講したいと思う。梱包と展示の方法が、博物館業務の要ではないだろうか。

実は、今回１点だけ返却の際開梱したら剥がれていたものがあった。発掘調査による出土品で、剥がれたのは、接着剤で接合していた部分である。他と同様個別包装していて、特に道中揺れたということもなく、なぜ剥がれてしまったのか。接着剤の劣化ではないかと考えたが、いずれにしろ今回最も肝を冷やした一瞬であった。幸い、その所蔵者は、筆者が勤めていた機関であったので大事にならなかったが。

美専車による集荷の際じっくり観察してみた。個別包装のためか、それほど特別な梱包ではなく、壷の口の周囲に薄葉紙を巻くくらいであった。基本的には、くしゃくしゃにした薄葉紙で挟み、それを布団でくるんで、段ボール箱に入れるというものである。

今回は、一つの箱（テンバコ）に小さいものを多数入れなければならない梱包が多かったので、そうした場合、どのような点に注意すればよいのか知りたいところである。今回テンバコごと貸してくれる機関もあった。返却時に置いてこられるという利点があるが、多くは、梱包を想定していないので、浅く、布団が入りにくく難しかった。

演示具を使って展示していた資料は、基本的に演示具ごとお借りした。時間短縮のためと慣れた演示具の方が傷などをつける恐れが少ないと考えたためである。

公用車から降ろす際、荷台の写真を撮っておくと、荷の量が把握でき返却の算段に便利であるが、どうしてもあせってしまって忘れがちであった。

さらに、収蔵庫に入れる前に、資料の状態によっては、くん蒸する必要がある。土偶の場合は、大切に保管されて（中には金庫に入れてあったものも）いるので、その必要を感じなかったのだが、個人所蔵品の１点だけ問題があった。木箱に保管され、見た目はきれいだったのだが、中の空洞部分に虫が潜んでいて展示室ケース内で繁殖した。

今回、借用先が多かったため布団が足らず、やや苦労した。借受中は忙しく、新たに布団を作っている余裕がない。

梱包材に限りがあるので、借受後は、収蔵庫に入れて開梱し内容を確認した後、良い布団は次の借受用に取り出して別のものと交換した。展示室まで運ぶ際に転がらない程度に薄葉紙にくるむなどして軽く梱包したのだが、小さくて見えなくなり肝を冷やしたのが１回あった。

梱包時、開梱時とも、しばしば確認することが出てくるので、資料調査カードを手元に置いて行う必要がある。

（4）美専車（美術品専用車）

重要文化財等の移動、遠距離、あるいは先方が求めた場合は、美専車で運搬しなければならない。今回は、関東地方以西の６機関、45点を運搬した。東京都区内３機関、山梨県１機関、埼玉県１機関に、群馬県の、隣接しているとはいえ１機関と点在していたため時間を要した。前泊含め、借受５日、返却４日である。

今回積算と入札結果に大きな隔たりがあり思い通りにいかなかった。前年度７月にA社に見積もってもらったところ非常に高く予算に収まらないため、改めてB社に見積もってもらい（100万円近く下がった）、それを目安として予算を組んだ。

当該年度４月に、その額を基に積算したが、通常の人件費等で計算すると高くなってしまい、予算額に合わせるため、開梱までにとどまり展示作業までは組み

込めなかった。実際の入札では、A社が大幅に下げてきたため（当初の見積もりより150万円近く）、予算が50万円以上余ることになり、それだったら展示作業まで頼めたはずなのにと悔しい思いをした。

また、会期の関係で４月に起案となってしまい、非常に苦労した。年度が変わり異動がかかるため３月中にアポが取れない機関があったためである。さらに、４月の会議を経ないと実際に貸せるか決められないという機関があった。他の機関のアポは大体とれていたが、美専車として連続して集荷するため、その機関の日程が決まらないと全体の工程が変わってきてしまうのである。毎日借受の日々の中やきもきして担当の方に電話をかけ続け、最後は泣き落としに近い状態で何とか４月19日（水）に決めていただき、美専車集荷の他の機関の確認を取って、やっと22日（土）に起案できた。

３　図録

最も楽しい仕事で、他の作業も忙しいので、作成は自宅で主に行った。博物館の書式は特になく、体裁を決め割付用紙を作るところから始めた。ところが、思い入れがありすぎて、他の図録を参考に書式を決めるのが遅くなり、２月から取り掛かったのに、割付用紙の完成は３月上旬にまでずれこんだ。「図録」なので、文章は最低限“穴埋め”的にしようと、割付用紙にまず写真を割り付けていった。ここで、借用資料のうち手元にない写真が多数あることに気づき、借り受けてから撮影だと図録の印刷に間に合わないので、既存の図録を参考に写真の貸出依頼に奔走した。その手続きが概ね済み、どうしても自分で撮らねばならない写真を３～４枚とし、見通しが立ったのは３月18日ころのことで、やっと文章に入れた。

土偶を専門としており、日ごろからそれなりに文章は書いているのだが、精神状態によるものか、筆が進まず、どうしても“毒の入った”文章になってしまう。自分では直せず、読んではもらったが、４月に入り、行数のずれるような大幅な修正はもうできなかったので、ほとんど直せないまま、４月中旬に写真の有無等を確認して割付を完成させ、18日にやっと印刷の可否起案、19日に見積もり合わせの起案、21日に業者に依頼発送して、その間に足りない写真を撮影し、28日に業者決定となって、やっと入稿した。

最大の危機は、割り付けを完成させた後、頁数が足りず、偶数奇数頁と振り分けた写真の割り付けと合わないことに気づいたことである。何度も確認したのだが、忙しさのピークで頭が朦朧とし気づけなかったのである。もう割付を変更する時間も気力もなく、何とか合わせるために、とりつくろったのがコラムのページである。

造本上８の倍数の頁数が良いことは知っていた。しかし、合わせる余裕もないのであきらめていたのだが、変更を重ねるうちいつのまにか54頁になっており、業者から「56頁だと製本が安定するので、どうですか」と言われ、校正時急遽２頁増やして、その際追加したのが「おわりに」である。

内容が硬いので、当初からマンガを見開きで掲載し、そのキャラクター（図５）を展示等でも使おうと考え、埋蔵文化財センター時代の知り合いに、予め最低いくらなら描いてくれるか打診し（ボランティア価格）、事務的に問題ないか総務に確認していた。

初校は５月11日、もどし16日、再校19日、もどし20日で、美専車集荷が21日～25日のため参校はあきらめたが、やはり間違いがあり正誤表を作成した。

筆者はインデザイン等の編集ソフトが使えず、ダイレクト印刷できないので、せめて紙をもっと薄いのにして安くしようと当初考えていたが、余裕がなくて結局通常通りになってしまった。頒布分は、指定管理者である事業団（５章参照）が支払うのだが、300部頒布することになり、県予算の元々の印刷部数が300部であったため、印刷費から含めて県と事業団折半ということになり、一冊当たりの頒布額が1,600円と非常に高くなってしまった。アンケートでも高すぎると批判されたが、なぜか売れ、増刷もして最終的に700部全て会期中に売り切れた。

４　パネル作成・展示・配布資料・撤収

（1）パネル、キャプション作成

展示品が土偶等で小さいため、上の空間がどうしても大きく開いてしまう。そこで、空間を多数のパネルで埋めることになった。会期まで余裕がなく、図や写真を準備する時間が取れなかったため、ほとんどが文字パネルとなってしまった。意外に苦情はほとんどなく、多くの情報を知ることができたと喜んでくれる方もいた。

原稿は筆者が作成したが、それ以外は、業者の契約事務から実際に展示するところまで、全てやっていた

だいた。

図録、美専車起案、借受にめどが付いた４月28日～５月６日にパネル原稿、５月８～９日にキャプション原稿を作成した。パネル原稿は、埋蔵文化財センター職員に校正してもらった。

何度も見直したが、会期直前で頭がだいぶ疲れてきており、誤りに気づけず誤植が数個出て、パネルも３～４枚作り直してもらった。間違ったのを参考までに列挙しておく。まず、キャプションの市町村名で、紫波町を雫石町としてしまった。認知機能が低下すると、同じ音（し・・）のものに間違うことがしばしばあるようである。同じく認知機能の問題で、「縄文時代が１万５千年前に始まった」と繰り返すうちに「縄文時代が１万５千年間続いた」としてしまったこと。遺跡名の漢字（うろおぼえのものを余裕がなく確認できず）。用語の一貫性で、「ｘ字型土偶」と「ｘ字形土偶」の両方使ってしまったこと。どちらでも良いと思っているとダメで、ゆれてしまい、事前に無理にでも決めておく必要がある。パネルもキャプションも、できるだけ同じ分野の学芸員に校正してもらうのが良いと思われる。

文字パネルが多いので、三つだけだが、図録マンガのキャラクター「なーちゃん」（図５）にコメントを言わせる小さなパネルも作成した。筆者は気の利いたコメントと考えていたのだが、全く好意的な反応はなく、むしろ「ハゲって言わないでね」に対して「このご時世にこのコメントはいかがなものか」（某議員の「このハゲー」が話題になっていたころ）とまでアンケートに書かれてしまった。

熟練者のため、パネルは、５月13日、14日のほぼ両日だけで作成された。

（2）展示・配布資料

５月16～17日で展示室にパネル設置。その邪魔にならないところから、筆者が開梱して展示開始し、５月16日～19日でほぼ終了、美専車集荷に行っている間、23日以後、演示具を設置し、テグス等で養生していただいた。美専車集荷分は、26日に開梱し、その後また養生等していただいた。

収蔵庫から展示室への移動もお願いした。小袋や小箱に入っていた資料をもどせるように、メモ用紙（裏紙をちぎったもの）にスケッチして特徴を明示したものを代わりに入れた。そのため、戻すことには問題なかったが、複数お借りした機関で、一つだけ小袋がなく、元々なかったのか判断つかなかったので、こうした点もメモしておく必要を感じた。また、機関によっては、借用品にシール等で番号等が示されているものがあるが、シールははがれやすく紛失しやすいので注意が必要である。

企画展を開催する特別展示室は、壁付きケースが主であるため、立体的なものは、見る場所から遠くても鑑賞に堪えられるが、板状土偶など長く平板なものは、手前に置かないとよく見えない。踏み台を用意すればよいのだろうか。二面見せたいものがあり、鏡などの使用も考えたが、ほとんどの土偶は自立できないため展示具が必要で、そうすると鏡に映しても演示具が邪魔で見えない。土偶の展示は、演示具で立たせる場合が多いが、今回は用途の展覧会であることもあり、自立できないのが土偶の特徴として、あえて立たせることはせず（借用先に専用の演示具がある場合は別）、斜台で済ませた。そのため、筆者はあまり養生の必要は感じなかったのだが、同僚が十分なくらいやってくれた。養生は、どのくらい必要なのか、第２章の梱包作業と同様、これまた理屈と共に実習を受講したいと思う。

照度は、指定されている基準に合わせると大分暗く、来館者から苦情があり、今回も「よく見えない。光を当てて」という意見が複数アンケートに書かれていた。特別展示室は空調がスムーズでないため暑く、展示時部屋の出入りの服装に苦労した。

その他に、展示したものは、第１章で紹介した模型と、縄文の森をイメージした白神山地のパネル、ハンズオンコーナー、クイズコーナーである。白神山地のパネルは、今回は森が用途に関わるため、生物部門の方にお願いし、実際に森に入り込んだと思えるくらい大きなパネルを作成していただいた（図４）。

展示室中央に設けたハンズオンコーナーには、当館所蔵の手代森遺跡の遮光器土偶のレプリカに、筆者所有の豊岡遺跡の遮光器土偶のレプリカを並べたが、寂しいので、展覧会とはあまり関係ないが、当館所蔵の萪内遺跡の出土土偶の頭部レプリカも含めた。実際の重量より200～300ｇ前後違うのであるが、今回は持って歩くことが用途に関わるため、それなりの意義を持ち、実際、来館者に「土偶を持ち歩くということをイメージできた」と好評であった。落とす恐れがあるので、ちゃぶ台程度の低さで設営していただいた。

当初の予定では、ここまでだったが、展示室中央は、

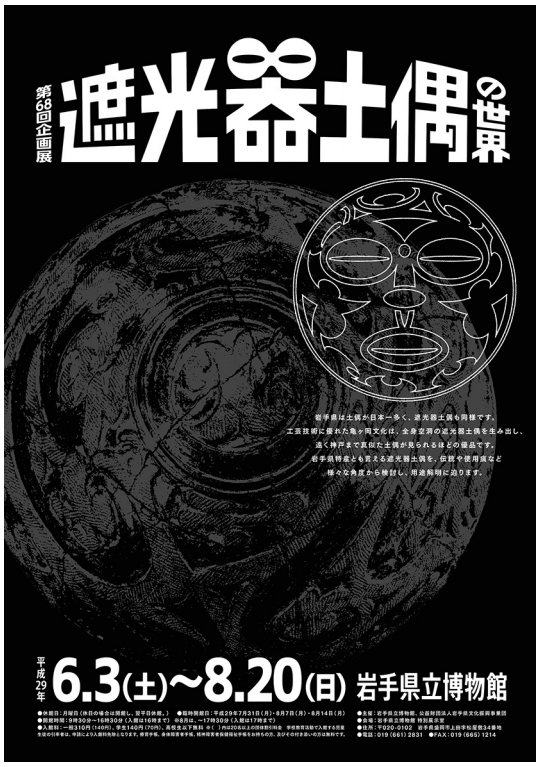

図１　ポスター・チラシ表

図２　行事案内リーフレット

図３　模型との写真撮影

図４　縄文の森のイメージパネル

図５　マスコット
キャラクター
（byオオツキ・フミ）

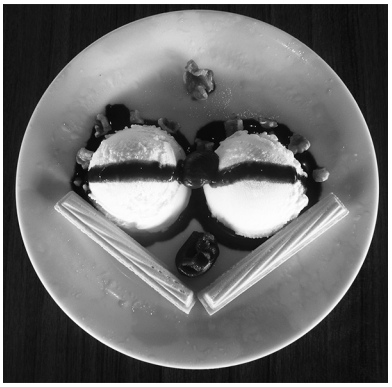

図６　遮光器アイス

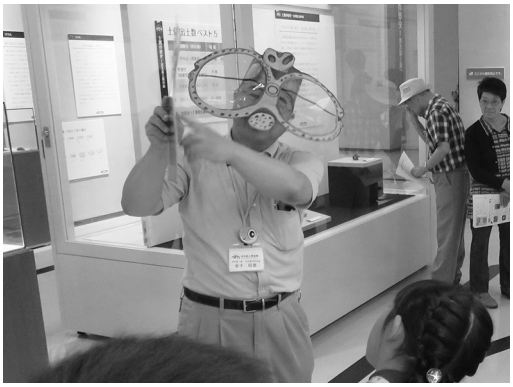

図７　子ども展示解説会

ハンズオンコーナーに加えソファーを置いても空間が残ってしまったので、急きょクイズコーナーを設けることにした。Ａ４のカードケースに土偶の写真の裏表を入れて、古→新の順に並べてくださいというもので、第２章の展示を基に作成した。正直、実際のところかなり難しいと思ったが、特に苦情はなかった。

展示の最初に「鑑賞の手引きシート」を用意し（図11)、注目点を指摘したつもりである。

企画展により、常設展示室から特別展示室に移した土偶が数点あり、元の場所に「特別展示室ニ居リマス」という札を置いてきた。言うまでもなく宮沢賢治のそれをもじったもので、岩手県立博物館にふさわしいと考えた。

展示品の収納は、８月22日～25日に行い、26日は美専車による集荷だった。22日～23日で箱に仮収納し、24日に返却する分だけ梱包した。その他の仮収納分は、24日に収蔵庫に移動していただき、また、博物館館園実習を兼ねて、パネル、サイコロ等全て撤収していただいた。人数が多かったため、あっという間だったそうである。また、次の展覧会担当者が準備を急がないと言ってくれたおかげで余裕をもって作業に当たれた。

5　告知・広告・マスコミ対応

(1) 告知

最初に原稿を求められたのが、当館の『行事案内春・夏号』で、２月上旬のことであった。全く承知していなかったため準備ができておらず、かなりでっち上げに近い状態で作成したが（図２)、関連事業等骨格はこの時に決まった。黒と赤を企画展のコンセプトカラーにすることにしたのも、この時である。黒は、遮光器土偶出土時の色、赤は使用時の色で、赤い顔料を振りかけられていたためである。１点で説明できる告知用の逸品は、企画展最後まで見つからず、いずれも「帯に短したすきに長し」で、この時は考古部門に保管されていた二枚の写真を組み合わせた（図２右)。美しい土器文様で目を引き、遮光器土偶の「世界」を表現したつもりである。その後は、告知にチラシを掲載してもらうことが多かった。

ここで、ポスター、チラシ（リーフレット）を作成する時期だと気づいた（図１)。自分でデザインはできないので、当館学芸員の知り合いのデザイナーに、また格安の値段でお願いし、材料だけ提供して希望を伝えた。通常とは異なる希望で、かなり面食らったと思われ、２月中旬にお願いし、何回かの校正を経て、デザインが出来あがったのは３月下旬のことであった。基本的には『行事案内』と同じ二つの組み合わせだったが、自由に使えて見栄えの良い遮光器土偶の画像がなく、また「遮光器」のイメージを伝えるには遮光器型の土製仮面の方がふさわしいと考えた。ただし、本物は別の機関所蔵の重要文化財で自由に使えないため、イラストでお願いした。さらに、個性的な展覧会であるため趣旨をはっきり伝えようと、文章（告知文）を入れてもらった。筆者を体現するようなアナクロな仕上がりで、黒と赤の色調が他の今どきのポスターの間で映え、満足である。

ポスター、チラシの印刷部数には非常に悩んだ。夏休み期間を会期に含み、遮光器土偶という全国区のものを対象とするので、西日本からの見学も期待できる。また、博物館だけでなく、埋蔵文化財センター等の発掘調査機関からの見学も想定でき、参考となる過去の展覧会がなかったのである。デザインはできているので、非常に安く印刷してくれる所が最近はあり、正直いくらでも印刷できるのだが、発送はこちらでやらねばならない。余ると、会期が終わればゴミになるだけである。結局、ポスター500、チラシ10,000部印刷し、概ね問題なかったのだが、県の広聴広報課を通じてポスターをコンビニエンスストアが貼ってくれることになり、ポスターを200部増刷した。また、当初想定していなかったことに、来館者にチラシを欲しがる方がいて、７月に1,000部増刷したが、案の定500部以上余った。なお、この間、ポスターチラシ関係の事務手続きは、デザイン委託を仲介してくれたこともあり、学芸の同僚が全ておこなってくれた。これにより４月の繁忙期の業務がかなり軽減され、感謝に堪えない。

当館の広報誌『博物館だより』No.153に、企画展の広報が載り、その締切が４月上旬であった。

３月上旬の青森市で開催された土偶研究会、５月下旬東京で開催された日本考古学協会、６月下旬青森市で開催された青森県考古学会で、以上の行事案内、チラシ、『博物館だより』を配布して宣伝した。土偶研究会の時点では、まだ印刷物ができていなかったので、展覧会概要をまとめたものを配った。

当館で連載している読売新聞の「土曜博物館」、朝日新聞の「博物館へようこそ」でも関連記事を書き、６月上旬に掲載してもらった。

ＳＮＳ関係では、会期中毎週「この一品」といった

図８　４月の借受日程

図９　９月の返却日程

企画展「遮光器土偶の世界」アンケート

1　どちらからいらっしゃいましたか。

ア　岩手県内（　　市・町・村）　イ　県外（　　都・道・府・県）

2　性別、年齢（何十代）、一般の方ですか考古学関係者ですか。さしつかえのない範囲で教えてください。

（　　）

3　展示内容はいかがでしたか。（記号に〇印をつけて下さい）

ア　満足した　イ　やや満足した　ウ　やや不満だった　エ　不満だった

4　今回の展覧会が開催されていることを何で知りましたか。
次の中から選んで番号に〇印をつけてください（複数でも結構です）。

①　展覧会ちらし・ポスター（ご覧になった場所：　　）
②　その他の当館の印刷物、博物館友の会発送物
③　新聞記事・広告（具体的に：　　）
④　ラジオ（具体的に：　　）
⑤　テレビ（具体的に：　　）
⑥　当館ホームページやツイッターなど、インターネットを通じて
⑦　知人から聞いて
⑧　来館して
⑨　その他（　　）

5　今回の展覧会の中で、特に印象に残った展示資料がありましたら、教えてください。また、第７章の説明は納得できましたか。

6　感想、意見・要望など、ご自由にお書きください（裏面も可です）。

ご協力ありがとうございました。

図10　アンケート用紙

「遮光器土偶の世界」展・鑑賞の手引きシート

＊よかったら、参考にしてください。

●第１章　土偶の歴史－遮光器土偶の前
・日本一土偶の多い都道府県は？
・大きさや形（立てる？）に見られる縄文土偶の伝統は？

●第２章　遮光器土偶とは
・宇宙人のような目は、どうやって生まれたか
・遮光器土偶が最も多く出土する都道府県は？　中心はどのあたり？
・遮光器土偶の種類は、いくつある？　その中心となるのは？
・大型遮光器土偶は、どのように変化したか
・「大型遮光器土偶の危機」とは？

●第３章　遮光器土偶の広がり
・遮光器土偶を真似した土偶は、どこにある？
・なぜ遮光器系土偶は作られたのか
・関東地方で元々作られていた土偶の名前は？
・土製耳飾り、東北地方と関東地方、どちらが優れている？
・山梨県金生遺跡出土中空土偶の元となった土偶は、どこの土偶？

●第４章　同じ時期の土偶
・ポーズは、何のポーズ？

●第５章　遮光器土偶を生んだ亀ヶ岡文化
＊関係する展示品（墓、工芸品）は、総合展示室、文化史展示室にもあります。
・軽米町大日向Ⅱ遺跡のガラス玉は、どこで作ったもの？
・亀ヶ岡文化のおよそ 1.300 年前の一戸町御所野遺跡（展示品と詳しい説明は廊下にあります）からどのくらい変化した？
・大芦Ⅰ遺跡の「４種類の土器」とは？
・縄文文化の特徴を示す三つのキーワードとは？
・縄文時代の人は、工芸品に何を付けるのが好きだった？

図11　鑑賞の手引きシートの表面（おもて）

感じで展示品紹介を、筆者が原稿を用意してツィッターに掲載してもらった。

その他、当館は（公財）岩手県文化振興事業団の下部組織でもあるので、ＦＭ岩手の文化振興事業団提供番組yougottacultureで２回、文化振興事業団のマスコミ広報の場「オープン事業団」では、パワーポイントを使って告知している。

(2) 広告

これも、契約事務は展覧会プロジェクトチームにやっていただいた。企画展で比較的予算に恵まれているため広告費が確保され、代理店を通じて、ＩＢＣテレビ、ラジオで宣伝してもらった。パック商品のようで、テレビでは、会期中ほぼ毎日１回コマーシャル（時間はマチマチ）、朝６時台の天気予報の背景（会期中一週間程度）、毎週土曜日午前放映の情報番組じゃじゃじゃＴＶ中継１回、ラジオでは、午後の帯番組ワイドステーションの中の中継（684ラジオカー）２回、同お知らせ枠で数回告知してもらった。

パック商品だったので仕方ないが、筆者はテレビよりラジオで、その代り回数を多くコマーシャルで取り上げていただきたかった。実際のところは不明だが、アンケート上テレビは思ったほど宣伝効果なかったようである。ラジオで、というのは考えがあり、テーマソングを何度も流して耳に残るようにしたいと思っていた。テーマソングは披露し採用していただいたが、素人だから恥ずかしいと遠慮したこともあって筆者の希望とは少し違っていた。コマーシャルは、テレビで１日１回のためか、反響はなかった。

このほか、さんさ踊りに関連して毎年発行される『さんさフリーペーパー　おでやんせ』（３万部発行）に、割引料金で広告を掲載してもらった。

(3) マスコミ対応

テレビ岩手に、夕方の番組「ごきげんテレビ」と「ニュースプラスワン」で中継していただき、また「ごきげんテレビ」内の「ごきげんクイズ」でも取り上げていただいた。ＮＨＫ盛岡でも、テレビ取材をしていただき、同じ内容を数回放映、筆者は知らなかったが東北地方という範囲でも流れたそうである。また、岩手ローカル番組で告知もしてくれていたらしい。

ＮＨＫラジオの岩手ローカル番組「まじぇ５時」の月曜日のパーソナリティーの方が考古学に興味があり、アシスタントの一人が御所野縄文博物館の学芸員であることもあって、７月３日（月）の番組に筆者を呼び特集していただいた。

月刊誌『文化財発掘出土情報』（株式会社ジャパン通信情報センター）は、無料で掲載してくれるので、４月に資料を送付し、会期中継続して記事を掲載していただいた。また、絵本雑誌『ＭＯＥ』７月号、東北北部地域誌『rakra』７・８月号、考古学雑誌『季刊考古学』第140号、骨董誌？『目の眼』９月号にも告知記事を載せていただいた。

新聞各社には好意的にとらえていただき、盛岡市内に配布される主要な新聞のうち、朝日以外の全ての新聞が取材に来て記事にしてくれた。

６　連携・関連事業

(1) 連携事業

借用先の一つである御所野縄文博物館から、企画展の会場にリーフレット等を置かせて欲しいと言われ、これ幸いとばかり、ミニプラザというスペースを提供し、御所野遺跡の世界遺産への取り組みを、展示も含めて、紹介してもらえることになった。主にパネル展示だが、立ケースも一つ提供した。

また、山梨県北杜市考古資料館でも、リーフレットを会場において欲しいといわれ、最初100部だったが、あっという間になくなり、その後会期終了まで二度追加をお願いした。実際に、当館の後来られた方がいらしたそうである。

(2) 関連事業

・土偶シンポジウム「土偶は壊す？壊さない？」

企画の経緯は、第１章に記した。13：30～15：30の予定で、筆者がまず30分土偶故意破壊説、非破壊説に関する研究史を説明し、10分休憩後、元（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団小野美代子氏に、「土偶の破損をどう捉えるか？」と題する基調講演を１時間お願いし、その後シンポジウム行う予定だったが、時間超過で、小野氏の講演が終了したのが15時29分であった。ただ、シンポジウムと銘打ったからには、ここで終了するわけにはいかず、予めお願いしていた研究者の方数名にコメントをいただいて、何とか16時過ぎに終了した。実は、予め講師から超過を示唆され筆者は容認していたのである。後に行事が控えているわけでもなく、15：30としたのも単なる目安だったからである。

対象は、土偶が壊されているかどうかが重要な問題であると知っている方（昔の教科書には載っていた）で、タイトルの意味が分からない方は、来ないと思ってい

た。ところが、ミスマッチで、筆者の報告の後「こんな話をこの後も続けるのか」と怒り出した方がいて「土偶を作った理由も分からないのに、壊したかどうかなど何の意味がある」と切って捨てて会場を後にし、それでも気がすまなかったのか、その後、展示室やミュージアムショップでも苦情を述べていたそうである。

一般向けには、筆者の日曜講座「遮光器土偶の使い方」を当てており、こちらに来ていただいたらよかったのにと考えた。ただ、自分の思うような会でなかった場合、昔なら黙って去っていったであろう。この他思いのほか時間超過に対する苦情も多く、また時間超過で討論の時間が取れなくなったこともあって、シンポジウムではないという意見もあった。140名と、会場の定員いっぱいの方に来ていただいたのに、満足感の低い会になってしまい、満足感の低いのは筆者も同様で、非常に残念であった。

・平成29年度考古学セミナー現地見学会

「土偶の里、花巻・北上―土偶多出遺跡の謎に迫る―」

７月下旬に、募集要項を、当館ホームページに載せてもらい、またチラシを、博物館友の会に配布し、館内に配置した。実際の応募は、往復はがきで、９月25日～29日にしていただき、定員20名で、先着順に受け付けた。

応募方法は例年通りで、例年はすぐ定員を満たす行事であったが、今回は、応募16名で、最終的に15名での開催となった。「良い企画だと思うが、現地集合だと年齢的に行けない」という電話が募集期間前にあり、嫌な予感がしたのが、その通りになってしまった。20名を超えないと、傷害保険料が高くなり、入館料も団体割引が効かなくなって、その事務処理に追われた。

当日は、9：45～12：10の予定で、9：30受付開始、１時間中村氏に大迫地区の土偶を中心に講演していただき、10分休憩後30分筆者が「土偶の里、北上地区」と題する研究報告をし、北上地区の多出遺跡と今回セミナーの趣旨説明を行った。その後中村氏に展示解説をしていただいた。今回は全て予定通りに進んだが、参加者の質問が多く時間超過した。講演の名手中村氏にお願いしたので、アンケートの満足度も高かった。応募者が少ないのだけが残念であったが、上記の理由によるもので、今回参加者の平均年齢がいつもより低かったことがそれを裏づけているのかもしれない。

・日曜講座

概ね好評だった。筆者の「遮光器土偶の使い方」には136名の方が参加してありがたかったが、質問と称して持論を述べる方が多数いて、それが30分以上続いた。やはり土偶には特別な思い入れのある方が多いことを改めて思い知らされた。

・展示解説会

展示解説会は、いずれも20名以上、中には40名の回もあり、おおむね好評であった。子ども展示解説会では、紙で作った遮光器の仮面をつけて臨んだのだが（図７）、特に反響はなかった。

解説会終了後、北上市大橋遺跡出土の報告書不掲載土偶破片を30点ほどハンズオン資料として提供したのだが、不人気であった。破片の本物より完全な形のレプリカの方が人気があるとは意外であった。ただし、子ども解説会では、興味のある子がいたため、他にもさわってみる子が現れて比較的喜ばれた。

・その他

当館の喫茶ひだまりで、期間の後半遮光器アイスを販売していただいた（図６）。筆者が、アイスクリームの付け合せに最適なものを聞いて回って企画した自信作で、実際に食べてみても美味しく、300円では安いとさえ思ったが、話題にはならなかった。

企画展開催中にミュージアムショップで販売する関連商品としては、「遮光器アイマスク」を考えた。以前にも土偶展は開催され、当館の常設展示室に遮光器土偶があることもあって、手ぬぐいやランチバッグ等の関連商品は既に置いてあった。これらとかぶらない新たな商品で、かつ、図録が高いのでワンコインで買える記念品を想定した。なかなか考えつかなかったが、３月上旬に青森市で開催された土偶研究会の折に500円程度の「ねぶたアイマスク」という土産品を見つけ、これだと思った。しかし、どこでこの値段で作ってくれるか皆目見当もつかない。インターネットで調べてもわからず、仕方なく購入した土産品店に電話し、納入している業者を教えてもらった。４月中旬に色よい返事をいただいて、「ただし開催日には間に合わない。６月中旬以降」ということで楽しみに待っていたのだが、その後全く音沙汰がなく、電話も通じなかった。金銭のやりとりをしているわけではないので問題はないのだが、非常に残念である。その時期、図録、借受、美専車と最も忙しくて業者を調べている余裕がなく、ある程度周囲にも打診してみたが協力は得られなかったので、仕方ないのだが、今回最も残念な出来事であった。

7　アンケート・来館者等・その他

アンケートは、これまでの展覧会のそれを参考に作成し、筆者が聞きたいことを項目化した（図10）。特に、５の「第７章の説明は納得できましたか」は、今回筆者の説を前面に押し出したため、ぜひ尋ねてみたかった。結果として、好意的なものもあったが、一般的でない個人の説を出すこと自体に激しい抵抗感を示す方が数人はいた。また、項目数が多すぎて、特に４は複雑だったためか、あまり参考にならなかった。このアンケートの結果から実態を掴むのは難しいようである。

会期中入館者数公称14,188人、アンケート回答282枚で、回収率は1.99％と低めなのに、模型の名前募集は、アンケートの倍近く集まり、むなしかった。

おわりに

知る人ぞ知る内容で、「こんなものを公にして何かの役に立つのだろうか」と執筆中何度も自問し、脱稿に時間を要した。冗長であると自覚しているが、「最終号」にも関わらず投稿数が少なく、編集者としての責任もあるので御容赦いただければ幸いである。

今回最も人気があったのは、「あなたはどこから来ましたか」で、地図にシールを貼ってもらう企画、次が模型との写真撮影、三番目がハンズオンコーナー、四番目が「模型に名前を付けてください」で、いずれも来館者が参加できる企画であった。土偶シンポジウムのクレーマーも、参加願望の裏返しと捉えることもできる。「不快に思うなら見なければ良い」とすることはできないのであろう。「インスタ映え」という流行語に象徴される、昨今の異常なまでの画像拡散願望も、参加願望の現われとも言える。したがって、集客のためには、参加できる企画を増やす必要があり、さらに、それを拡散して共有できる形に加工できれば言うことなしであろう。参加型展示が求められているようである。

アンケートの回答の文面にきついものが多かったのも、自分が理解や納得できないと、疎外されているように感じるからではないだろうか。しかし、実際には、極めて多様な意見があり、賛否両論が常にあることに驚かされた。例えば、文字パネルが多いことについて、多すぎて読むのが大変という意見がある一方、非常に多くのことを知ることができてよかったという意見もあったのである。

しかし、参加型企画でもクイズは人気がなかったことから、参加に知識の習得や努力を要するものは、あまり好まれないようである。そういえば、昔と異なり、展示場でスケッチしている人は全く見かけなかった。

今回、印刷物と展示に代表されるように、多くの方の御協力によってなんとか無事開催できた。展覧会には非常に多くの作業があるので、他の方にお願いできるもの、特にその方の方が早く上手にできる場合は、甘えても良いのかもしれない。また、やるべきこと、やりたいことに優先順位をつけておいて、時にはあきらめることも必要なようだ。そして、前例に倣えば（改変すれば）大抵のことは事足りるので、話を伺い文書データ等は融通していただいた。さらに、筆者のように、若くない人は忙しくなると脳の容量を超えて、とにかく忘れてしまいがちなので、思いついたら、まずメモして、今やっている作業に戻るのが有効だと感じた。

註

1　ただし、展示者の説であって、一般的な説ではないことに不満を述べる見学者が数人はいた。アンケート結果による。

2　アンケート結果を見ると、「わかりやすくて良かった」という意見もあったが、「難しかった」という意見も多く、さらには、「日本語としておかしい。組織内で校正しているのか」という意見まであった（同様三通）。図録と違い、パネルの文章は、同業者だが、十分に校正してもらって直している。

参考文献

小田野哲憲（1983）「岩手県出土の『蓋形土器』について」『岩手県立博物館研究報告』第１号：66-83

佐藤祐輔（2015）「Ⅳ.７　東北」『考古調査ハンドブック12　弥生土器』ニューサイエンス社：397-446

要　旨

昨年、53歳にして初めての展覧会を担当した。企画展「遮光器土偶の世界」というもので、本稿は、その備忘録であり、同じような境遇に陥った方の参考になれば幸いである。

キーワード：企画展、開催準備、経過、反省